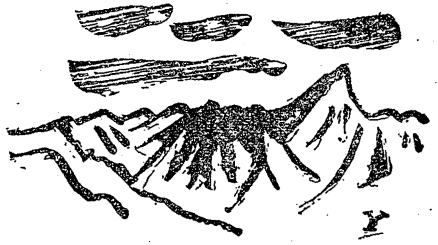
文部時報

第882号

1951年 2月号



◇学習指導要領（小学校）改訂の要点◇

《一般編》教育目標の明確化と教育課程の改正について……木宮乾峰……二

《社会科編》現在の問題と中間発表の内容……上田薫……六

《理科編》一般目標の再組織と理解の目標の確立……岡現次郎……一〇

《音楽科編》読譜指導の系統化と歌唱教材の最低基準……真篠将……一四

学校給食施設の基準図案の紹介……池田傳蔵……二三

教育委員会の運営（続）……木田宏……三〇

日本の宝……猪熊弦一郎……一九

通達

小学校学習指導要領音楽科編「各学年の指導内容」……六四

小学校学習指導要領算数科編「一般目標と指導内容」（続）……九〇

学校教育法施行規則の一部改正について……三六

学校の環境維持について——文教地区建築条例——……四〇

○文部省重要通達事項一覧表……九六　○文部日誌……九一

日本の宝

—映画「フランスの宝物」について—

猪熊弦一郎

ロダン

私がフランスから戦争で引上げて来て、もう十年になる。戦争中藤田さん夫妻と一緒に、スペイン境のレゼジーという所に約四、五十日避難していたが、ホテル生活では費用もかさみやり切れなくなって、又パリーのアトリエに引き返していった。もうその頃は、日本から来ていた多くの友人はほとんどアメリカ経由で引きあげていった後で、ぽつねんと取り残されたようになって実に淋しかった。戦争のほうもますます激烈になってフランス側は日増しに旗色が悪くなって行った。

空襲警報も一日おきぐらいに鳴りひゞき、そのたびに私たち二人は近くの地下のアブリ（防空壕）に逃げ込んだ。外出は必ず防毒マスクと、応急用具を肩にかけて出かけるようになった。その内に飛行機がやって来ても、余りパリーの街の中はやられなくなったのでいつしか馴れて平気になって、夜になるとマスクを肩にかけて、よく映画や、芝居に出かけたものである。丁度その時パリーに残っていたF君が新聞を持って来て、とても素晴らしい映画をやっているから見に行こうと誘ってくれた。

その映画はトレゾール・ド・フランス（フランスの宝物）という題で、有名なサッシャギトリー（俳優であり脚本家である）が二十才ぐらいの時に多大なる私費を投じて、その時代の大芸術家を映画のフィルムにおさめたのである。その中に出て来る芸術家にはドガ、ロダン、モネ、ルノアール、サラベルナール、サンサーン、アナトールフランス、その他に有名な俳優（これはサッシャギトリーのお父さんであったと記憶している）弁護士等を、非常に短編であるが、撮ったものであった。

サッシャギトリーも戦争が日増しに苛烈になって来るし、パリーの運命もどうなるかわからなくなって来たので、今までながらく私蔵して来た、これらの貴重な映画をこの際公開しようと思い立ったのである。この映画は勿論無声であるから、それに一つ一つその撮影の時にグランメートルと交わした話とか、又はその撮影の為の苦心談等を、ギトリー自身で説明をするというのである。私どもは二つ返事でこれを見る為にまずF君にたのんで入場券を買ってもらって出かけた。テアトルマデレーヌという劇場で公開されたが、大変な人気で場内立錐の余地もない有様であった。

私はその後又O君たちを誘って、再び見に行ったが、とにかく公開以来大変なサンサションを起してなか〳〵入場券を手に入れることが困難になった。やっとのことで手に入れて出かけ、すっかり又

新しく感激してしまい、その夜はとう〳〵眠れず、一晩中短編のこれだけの映画が、これ程私たちの心を大きく打った事実について、何がそうさせたかを考え続けた。私たちは幾多の写真を通じてルノアールもマネも、ロダンも、ドカも、見てはいるが、動くこれらの偉大なるアルチストを目のあたり見たことは全身全霊の感激でなくて何であろう。もしもサッシャギトリーが、二十才の頃撮ってくれていなかったら、世界中誰も、動くこれらのグランメートルを見ることはできなかったであろう。

その中の一例をあげると、ロダンの場合、あの美しい白いあごひげの温顔で、アトリエの中で一心にマーブルを彫刻しているところである。大きなマーブルを、ツチとノミで、ひとつひとつ刻んで行く。そのたびに、小さなマーブルのかけらがあごひげに引つかゝって、実に愛らしく美しい。この時にロダンがギトリーに言ったことばは、「もし撮影が始まったら、知らせて下さい。私は手をやめてじっと静止しますよ」と。まったくうれしい話である。ロダンは映画は動いていても撮れるということを知らなかったのである。動くロダンは、ただこれだけである。ルノアールの場合は、もうすっかり中風で手の指が、おしつぶされた不具者の曲った指のようになっている。この不自由な指に筆をはさんで、画面に向かって一生懸命描いている。頭には耳かくしのついた鳥打帽(カスケット)をかぶっている。かたわらに令息のピエールルノアール(その頃十二三才に見えた)が、お父さんの片腕になって、色を出すことから、煙草の火をつけることまですっかり、手つだっている。ギトリーも二十の青年で、若々しい姿でかたわらに立っている。一筆カンバスに当てるたびごとに、目を細くして上体を後方に引いて画の調子を見るところなど、とても感激にたえない。ただこれだけのシーンであるが、この時の貴重なギトリーの説明があったはずだが、私には残念ながらじゅうぶんにわからなかった。

ドガの場面は、ドガを撮る為には大変な苦労をギトリーは経験しなければならなかった。ドガは有名な頑固おやじであったから、映画を撮る等のことはまともに承諾するはずがない。いきなりどなりつけられてしまった。この時、ギトリーが「メートル・ドガ」と言ったのが気にさわったのだ。ドガ先生と言われるのが気に入らなかったらしい。大喝一声「ドガ先生とは何だ。」と言われてしまい、とうとう正攻法では撮れなくなってしまった。それから、ドガのアトリエの前の通りに、丁度広告塔があったので、その陰に映写機を立て、毎日ドガが出て来るのを待ちつくした。ある日、ドガは現われた。しかしまんまと失敗した。ドガは写真のレンズとは反対の方へ消えてしまったからであった。その翌日、突然にレンズのほうに向かってやって来たのをうまくキャッチすることができた。姪の肩に手を置き、古い山高帽子をかぶり、大きい二重まわしのようなものを羽織って、一見こじきのように見える。他方の手にはステッキを持ち、よち〳〵と、撮影があるのも知らず歩いて来る。突然、自分の目の前にある異様な機械に気がついて、アッという間にすいと人道からレンズの前を横切って車道に降りてしまう。これだけのほんとうに、ものの一分間ぐらいのドガである。しかし、動くドガはこれをおいて世界のどこにもない。この幾メートルかのフィルムのみが、フランスの宝であり、世界の宝である。

ひとつひとつについて細かく語る紙面を持たないが、どれもこれも大きな感動なくては見られないものばかりである。ギトリーが二

デッサン　　マチス

十才の若さでこの偉大なる大芸術家を、しかも私費をもって撮ったということは、ほんとうにフランスにとり、又世界にとって一大功績でなければならない。このわずか二十才の青年が、全フランスを刺激した為、その後戦時中や、戦後に続いてフランスは偉大なる作家の映画を作成することに成功している。

過日東京で試写されたロダン、マイヨール、ゴッホ、マチス、これらのフランスの宝の映画は、明らかに大きな後世への使命を感じ慎重な計画の下に仕事が進められ、一本の立派な文化映画として完成されている。故人となったゴッホ、ロダンの場合は、作品のみで映画の特殊技術を駆使して実にすばらしいものを作り上げた。マイヨール、マチスは、現存の時に作っているから、なおいっそうすばらしく、全くドキュマンタルなものである。この映画のマイヨールは、今はすでになく、これによって動くマイヨールを後世に伝えるたゞ一つの貴重な記録となってしまった。

私はこれらの映画を見て、ますます強く希望し叫びたいことは、今の日本における偉大なる高齢の芸術家をぜひ映画におさめておかなければならないということである。今直ちにでも、この計画を実行に移さなければ、必ず、後悔するであらうと思う。その為にも今度の四つのフィルムが、日本で、上映されたということは幸いであった。

識者に、そして当局の方々に、私は再び言う。「日本の宝」をぜひ逃がさないでほしい、と。

MEJ 8316
文部時報
（毎号定価46円）
2月号（第882号）
特別定価55円
送費　3円
誌代1箇年552円
送料　〃　36円
計588円
ただし増大号の場合は別に代金を申しうけます。なお御申込みは直接発行所にお願いいたします。

昭和10年10月3日第三種郵便物認可（毎月1回10日発行）
昭和26年2月5日印刷・昭和26年2月10日発行

編集者　東京都千代田区霞ヶ関3の4　**文部省調査普及局**
発行者　東京都中央区銀座西7の1　帝国地方行政学会
代表者　大谷保
印刷者　東京都立川市曙町3の55　行政学会印刷所
代表者　藤本外次

発行所　東京都中央区銀座西7の1　**帝国地方行政学会**
（購読申込所）　電話銀座(57)660－663　振替口座東京13番